

「歴史的な和平合意」と形容されるPLOとイスラエルの九月一三日合意は、パレスチナ人の権利を確認したのではなく、イスラエルとアラブとの正常化に向けた歴史的な一步としてあつた。それはクリントンが対外政策の成果を誇示しようとした祝賀ムードを尻目に、ラビンがモロッコへ飛んだことにも示された。

だが、ラビン政権が予測したように、アラブとの関係改善は進行しなかつた。

一月一六日のアサド・クリントン両大統領のジュネーブ会談は包括和平をうたつた。親イスラエルのクリントン政権が、シリアの要の位置

を理解し、包括和平を抜きにしては中東問題を解決することはできない、という認識を示したのである。

それによって、再びアラブの統一的な対応が作られるかに見えた。

だが、二月九日のカイロ合意は、再びそれを元に戻した。ラビンから「信頼できない」と烙印を押されたアラファトPLO議長は、それでも九月一三日合意を推進する、言い換えれば、個別利害を第一とすることを明らかにしたと言える。

クリントン政権がアラブ諸国に執拗に迫って

月刊 中東レポート

包括的和平か、個別利害の優先か

一九九四年二月一〇日

第98号

発行 ウニタ書舗
東京都千代田区神田神保町1-52
TEL (03) 3291-5533
編集 J.R.A.
郵便振替 東京1-48443
三菱銀行神保町支店 当座9012656
会員制 年会費24,000円

目次

包括的和平か、個別利害の優先か.....1
資料.....6
・新たな地平の切り開き
・決議四二五に関する矛盾した見解
・イスラエルは和平過程を戦争の準備に利用
・レバノンの水問題（抄）
・暴力にも西側の民主主義にも反対（抄）
重要日誌（一九九四年二月一一日～二月一〇日）：15

いるアラブ・ボイコットの解除は、ガザ・ジェリコから崩されていこうとしている。
他方、そうしたことは占領を正当化することであり、決して許せないと、人民の鬭いは展開されている。
今号ではそうしたところに焦点をあててみたい。

一 ジュネーブ・サミットとシリア、米国の思惑
アサド大統領とクリントンの会談は、一二月のクリストファーの歴訪以前に、同会談の二ヵ月前に、すでにアレンジされていたという。しかし、もしその時点でなされていたら、あるいはもし一二月一三日にガザ・ジェリコから形式的にでも撤退が開始されいたら、その重要性は大きく違っていた。クリントンはアサド大統領に、「和平に向けてもっと勇気を持って踏み出せ！」と言うだけでもよかつたからである。
前号で記したように、シリアはダマスカス宣言諸国外相会議を開き、それを持って会談に

臨んだ。これは、シリア単独の意見ではなく、アラブ全体の意志を反映した意見であることを強調することになった。

△ゴランの返還（二四二）、南部からの撤退

（四二五）、といった国連決議の遵守を基礎にした正当で包括的な和平こそが、中東問題の解決と永続する和平にとって不可欠である▽というアラブの統一した対応が示されただけではなく、米国は、好むと好まざるとにかくわらず、シリアの重要性を無視することはできない、ということがジュネーブ会談で証明された。

△正常で平和的な関係、対決を終結させ、和平を作る時である。こうした関係を達成するためにも良好な確信の下に交渉し、遂行しなければならない。今やボールはイスラエル側にある。イスラエル指導部からの肯定的な応答を引き出し、諸国が細部の詰めを行うことを希望する。シリアがイスラエルとの包括的な和平を達成するための要であると確信している。私はイスラエル指導部が肯定的に応答することを希望する▽とクリントンは記者会見で強調した。

この会談結果をラビン政権に報告に行つたロス（国務省の中東和平担当）は、「アサド大統領の公開の声明で和平過程の新しい基礎は創出された」とまで語った。

これに対してもラビンは「国民投票」を云々することをかわそうとした。が、そうしたあたり方に対しても、政権内部、労働党内からも批判が出たばかりか、クリントン政権も「ショック」であると表現した。

と語った。
そして、同日、ペレスは米国で、アサド大統領は「シリアの指導者としてだけではなく、アラブの指導者として」交渉を進めるとしているし、アサド大統領が「シリアとイスラエルの和平だけではなく、イスラエルとアラブ世界の間の和平を」交渉していることをわれわれは知っている、だが、イスラエル人は「シリアがイスラエルに対して保有しているもののすべてを放棄するように望んでいる」ように感じており、それをなくすためにも、フセイン国王が宣言しているように行動すること、「交渉のレベルを上げることが必要である」と強調した。

フセイン国王は、湾岸戦争以降の米国との関係改善のためにも、そして包括的な和平のためにも、自らが露払い役となることを宣言したと言える。が、シリア側は、そうしたイスラエルのよびかけを却下し、△ゴラン、南部レバノン、西岸、ガザなどの被占領下のアラブの領土に一人のイスラエル兵でも残っている限り、ラビンとの会談はない▽と対応した（二月三日、オーストラリア首相に対するアサド大統領発言）。

一月下旬にアラファト議長は湾岸戦争以来初めてサウジを訪問し、ファハド国王らと会談した。ある外交官が「雰囲気は冷たいもので、中心的なことはほとんど話されなかつたが、会談は和解への道の第一歩として重要である」と語ったように、それはアラファト議長にとって、湾岸戦争で冷却した関係を修復し、湾岸諸国からの支援を得る重要な第一歩としてあった。そし

また、シャラーム外相は、報告を行つたアンマンで、△ラビン政権が国民投票云々は包括的で正当な和平のために積極的に働くことを証明すべきである▽と批判した。

英國のガーディアン紙も、△国民投票云々はラビンが選挙で公約した和平への姿勢に反することであり、国民にゲタを預けて、自らの責任を怠るには能動的に和平の方向へとイスラエルの世論を牽引していくことである▽（一月三日、マンスフィールド）とそうした無責任な対応を批判している。

そうしたことも反映したのか、ラビンは後で「本音」を展開しているが、それは後の節で見たい。

二 フセイン国王の訪米とアラファトのサウジ訪問

フセイン=ヨルダン国王は一日ホワイトハウスでクリントンと会談した。それは、ジュネーブ会談をさらに進めるという意味を持っていたことはもちろんだが、ヨルダンにとっては湾岸戦争以来の米国との関係=国際シオニストの改善における重要なものでもあった。

すでに、ハッサン皇太子がペレスと会談し、フセイン国王自身も一月初めにペレスと会談したが、フセイン国王はさらに一步を進めた。二四日、在米ユダヤ指導者たちとの会談で、両

国民の「共存」を語り、「六日のクリストファーとの会談の後では、△そう遠くない時期にラビンと公然と会談することを希望している▽と語った。

他方のラビンは、国民投票を云々しつつ、同時に、「われわれはすでに撤退の原則で合意してきました。撤退は領土上の妥協を伴う」、「私はこれまでにゴラン高原はイスラエルの不可分の一部であると約束したことがあるうか」とゴランの返還の用意があることを示唆し（二〇日）、△アサドどこででも会う用意がある▽、△ワシントンの交渉ではシリアとのそれが眞の中心的交渉となる▽ことを強調した（二三日）。

当面の交渉対象としてはヨルダンは第一、第三としていたフセイン国王の発言を歓迎しつつ、ラビン政権はその本音（？）を吐露することに至った。二月一日、ラビンは、「アサドはイスラエルと調印した暫定合意を尊重する国家の元首であり、われわれにとってアラファトが約束を守るかどうかとチェックするようなことをしないでいい。アラファトとは段階的な動きをし、彼が約束を守つているかどうかを確認しなくてはならない」とはいえ、アラファトはイスラエルにとって「ペレスチナ人の中の唯一のパートナーである」、「アサドがエジプトのサダトがしたようにすれば、シリアとの和平過程には何の問題もなくなる」、シリアはエジプトよりも安定しているのをわれわれは知っている、だが、アサドは米国との接近はイスラエルを経由してなされるべきことを理解するよう私は望む

て、その裏には、ガザ・ジェリコ合意を支持、支援するようにとの、米国からのサウジへの圧力があつたことを記しておこう。

だが、そこでの発言はフセイン国王の琴線に触れるものであった。ファハド国王と会談したアラファト議長は、「われわれがともにアル・アクサ・モスクで祈りを捧げたい。私はアル・アクサにおける彼の責任を確認するし、彼がこの責任を全うする能力があることは確実である」と語ったのだが、これはフセイン国王の無視にもつながる。

サウジの国王が「二聖都の守護者」という称号を有している。が、モスレム第三の聖地エルサレムに関するハシミテ王家の管理責任などについて、歴史的にはハシミテ家はサウジからサウド一族によつて追放されたのである。一年ほど前にも、アル・アクサの修理費をサウジが援助すると発表したとたん、それまでそうしたことを行つていたフセイン国王が、慌てて英国にある邸宅を売却して、その費用を捻出すると

の権利を再確保することを支援することである。が、私は、シリアやレバノンとの協調が正常なに、われわれの協調がそうあるべきものとは言い得ない」とPLOのあり方を非難した（二月八日）のは、和平過程における、とりわけPLOとヨルダンとの関係性、そこでPLOのあり方を非難しただけではなく、暗にアラファト議長のサウジでの発言をも非難したものと多くの人は見ている。

三 カイロ合意——イスラエル軍の勝利

△ジュネーブ会談に對して、アラファト議長は、△包括的な和平というアサド大統領の立場に感謝する▽と述べた（一八日）。相前後して、ラボ情宣局長、アブ・マーザン对外関係局長が、アラブの協調の必要性を語った。

だが、それらは、△シリアがイスラエルとの和平を行い、イスラエルがパレスチナ人に何らの妥協もする理由がなくなることを恐れている▽ことの裏返しであるという見方があった。

ガザ・ジェリコ合意の裏方を務めたホルスト=ノルウェイ外相の葬儀は、そうしたアラファト議長の懸念を解消するのに恰好の場を与えることになつた。そして、会談はダボス（スイス）へ移され、そこでほぼ調印寸前にまで至つた（三〇日）。が、そこで、軍部からの横槍が入り、調印は先送りとなつた。

アラファト議長が、△九月一三日の合意を実際に実行するための最終合意は非常に近い▽と語り、ペレスが、△一週間後にカイロで合意す

破壊は六三戸、土地の接收は五四〇〇ヘクタールという数字が二月七日に発表された。こうした現状だからこそ、人民の鬪い＝インティファーダが燃え上がっているのだが、アブ・シャリフは、△こうした現状がカイロ合意（すなわち、妥協）を作った△と語った（二月一〇日）。だが、こうした妥協が、自らの地位のため、占領を保護するためのものでしかないとしても、はたして人民はそれを歓迎するであろうか？

他方、クリントン政権などが必死になつてアラブ諸国に圧力をかけているアラブ・ボイコットの解除は、副大統領のゴアを代表とする「平和建設者協会」が中心になつて、ガザ・ジェリコからそのなしくずし化を策動している。つまり、ボイコット対象企業がガザ・ジェリコへの投資をちらつかせ、それを通じてアラブ全域への浸透△実質的な解除を策しているのであるが、これには在米のアラブ社会からの協力やPLOからの支持を取り付け、アラブ連盟もそれに賛成することになっている。

だが、当然ではあるが、被占領地内部の人民の間では、こうした形での自己利益の優先、アラブの連帯を目指崩壊させるあり方への批判、拒否反応がよりいつそう強くなっている。

カイロでの調印の後、アラファト議長は、パレスチナが中東の地図に戻ることを強調したが、彼がパレスチナ国大統領という肩書きの使用を停止したことがイスラエル側から発表された（二五日、ラモンなど）。一方での弾圧の拡大、

カイロでの実務交渉は難航し、アラファト議長のカイロ行きすらが問題となつた。

軍自身が外務省との矛盾を公然と認め（二月四日、バラク参謀長）たり、△軍部が交渉に口をはさむことが多いが、これはおかしい。政府は決定し、軍はそれに従うのが原則ではないか△（メロン、労働党員、二月七日）、△代表團長は継続的な軍のアドバイスが必要である。が、決定は団長の権利であり、制服がそれを左右してはならない△（ハーレツ紙、同日）というようにイスラエル国内で問題になつたが、軍部が強行姿勢を示して、PLOに妥協を迫ることになった。

カイロでも軍部が反対したことは、調印式の遅れとなつて如実に示された。午後七時にエジプトの大統領府は記者団に召集をかけた。が、軍部の横槍を受けたラビンから待つたがかり、調印式はなし、という状況にまで至つた。ムバラク大統領がラビンに電話して、ようやく二時になつて調印にこぎつけたという。

アラファト議長は、「（九月一三日の）原則宣言を紙の上から実際のものとして実行する上で非常に大きなステップ」であり、「われわれはわれらが人民の新しい時代を創出できることは確実である。われわれは、パレスチナ、パレスチナの名前が、中東の地図にパレスチナが戻つたと言つていい」と強調した。

しかし、イスラエル政府の報道官が、入植者や極右などからの批判に対して、「われわれは

は、△軍部が反対したことは、調印式の遅れとなつて如実に示された。午後七時にエジプトの大統領府は記者団に召集をかけた。が、軍部の横槍を受けたラビンから待つたがかり、調印式はなし、という状況にまで至つた。ムバラク大統領がラビンに電話して、ようやく二時になつて調印にこぎつけたという。

アラファト議長は、「（九月一三日の）原則宣言を紙の上から実際のものとして実行する上で非常に大きなステップ」であり、「われわれはわれらが人民の新しい時代を創出できることは確実である。われわれは、パレスチナ、パレスチナの名前が、中東の地図にパレスチナが戻つたと言つていい」と強調した。

しかし、イスラエル政府の報道官が、入植者や極右などからの批判に対して、「われわれは

ることに樂観的である△と語った（二〇日）が、カイロでの実務交渉は難航し、アラファト議長のカイロ行きすらが問題となつた。

軍自身が外務省との矛盾を公然と認め（二月四日、バラク参謀長）たり、△軍部が交渉に口をはさむことが多いが、これはおかしい。政府は決定し、軍はそれに従うのが原則ではないか△（メロン、労働党員、二月七日）、△代表團長は継続的な軍のアドバイスが必要である。が、決定は団長の権利であり、制服がそれを左右してはならない△（ハーレツ紙、同日）というようにイスラエル国内で問題になつたが、軍部が強行姿勢を示して、PLOに妥協を迫ることになった。

カイロでも軍部が反対したことは、調印式の遅れとなつて如実に示された。午後七時にエジプトの大統領府は記者団に召集をかけた。が、軍部の横槍を受けたラビンから待つたがかり、調印式はなし、という状況にまで至つた。ムバラク大統領がラビンに電話して、ようやく二時になつて調印にこぎつけたという。

アラファト議長は、「（九月一三日の）原則宣言を紙の上から実際のものとして実行する上で非常に大きなステップ」であり、「われわれはわれらが人民の新しい時代を創出できることは確実である。われわれは、パレスチナ、パレスチナの名前が、中東の地図にパレスチナが戻つたと言つていい」と強調した。

しかし、イスラエル政府の報道官が、入植者や極右などからの批判に対して、「われわれは

われわれが望んだもののほんどのものを手にした。（失敗ならまだしも）なぜ、成功に謝罪しなければならないのか！」と語ったように、軍部△ラビンのゴネ得の合意になつたし、なによりもまだ撤退開始の期限すら不明なのである。イスラエルが出入り口を管理し続け、ガザは獄であり続ける△（ガザの医師）といった反応に示されるように、まったく冷淡である。

そして、それは当然ながら、人民の鬪いを強化していくことになつている。

四 人民の鬪い

ワシントンの交渉団の一員であるアガ氏は、二月三日、「われわれは、われらが人民に対して、われわれがイスラエルと和平について討議△交渉していると語ることはできない。なぜなら、彼らが実際に和平とは反対の事実を見ているからである」と語つたが、被占領地で現実に起こっていることを適切に示した言葉と言えよう。

その日、ガザでは、女装した「特務」がラバハのファタハのタカ指導者を襲撃。射ち合いに占領に対するレジスタンスを見てみよう。レジスタンスに対して、イスラエルや米国はテロリスト行動としてレッテルを貼つているが、人民レベルでは人民の正当な抵抗権として認知されている。

イスラエル側は△レバノンに対する領土的な野心はない。問題はイスラエル北部の安全保障である△と繰り返しているが、イスラエルの無条件撤退を求めた安保理決議四二五をあいまいにし、占領を正当化しようというあり方は不斷に展開されている。

一月二一日に、ブエズ外相は、△レバノンはイスラエルの国境線への撤退を明確に要求するし、そうしたことでの揺るぎなき約束がなされれば、関連するすべての問題に関して討議する用意がある△と、改めてイスラエル側の主権に関する明確な対応を促した。

しかし、副参謀長シャハクは、議会の外交防衛委で、△南部レバノンでは全面的な戦争が継続している、九三年のゲリラ活動は三三〇を数え、前年の二倍近くに増えている、これは実際的な戦争情勢である△と語り、イスラエル軍の活動を正当化したし、実際、占領軍の活動は強化された。

だが、前号で伝えた国連軍への攻撃などのよ

うに、占領軍の挑発的な行動の拡大が、逆にレジスタンスの拡大とそれへの人民の支持をよんでいるのである。

そうしたなかで、レジスタンスによる大規模な作戦が展開され、二月七日には、イスラエル戦車を破壊し、イスラエル兵四人が死亡し、五人が負傷した。慌てたイスラエル軍は、執拗に空爆を展開する一方、△シリアがハズバラーの作戦を沈静化しようとしている。他方の側がハズバラーを鎮圧するまでこの戦争は続く△（バラク）と喚き、国務省の報道官も△この作戦の一部は和平過程を破壊することを目的としたものであり、シリアはこうした視点から影響力を行使できると考える。シリアが反和平勢力に聖地を提供していることが米の懸念を作つている△と語った（八日）。翌日クリントンも、△シリアはイスラエル国民の信頼を達成するため、全面的に意味のある和平を望んでいることを示さなければならない」と語った。

これに対してシリアは、△シリアはイスラエルの占領を護る警察官の役割を拒否する。レバノン人民には不当な占領に対する抵抗の権利を有しているとシリアは考へている。ラビンは自らの占領こそがレジスタンスの原因である△と政府高官は反論し（九日）、一〇日のティッシュリーヌ紙は△占領に対する人民のレジスタンスは正当な権利であり、南部の軍事的な爆発を作らうとしているのはイスラエル側でこそある。イスラエルはそうすることで和平過程を破壊しよう

カ・メンバーが逮捕されたし、軍用車から無差別乱射し、一三歳の少年が負傷するという事件も起つた（後者は、ロイターのカメラマンがその一部始終をフィルムに収めた）。さらに、ガザで、裏切り者が殺されたが、軍当局は、△この三日間で殺された「協力者」△裏切り者のハマスが四人、ファタハが三人である△と発表した。

その同じ日、ヘブロン地区では、前日の入植者への攻撃（三人負傷）を口実に外出禁止令が施かれていたが、その中で、一人のパレスチナ人が射たれて重体となつた。

一二月一三日の撤退開始の遅れだけではなく、ラビン政権は被占領地への軍の増強に加えて、裏切り者と△特務△、軍の弾圧策動を飛躍的に拡大してきた。そして、最近は、いったん解除したはずのタカを中心的に狙い討ちしてきた。

ラビンは、△安全保障の大切さを強調し、自らのファタハのタカ指導者を襲撃。射ち合いに占領に対するレジスタンスを見てみよう。レジスタンスに対して、イスラエルや米国はテロリスト行動としてレッテルを貼つているが、人民レベルでは人民の正当な抵抗権として認知されている。

獄中者の釈放問題もウヤムヤになり、この間△信頼醸成措置として釈放された数以上に逮捕者が出している現状にある。また、九月一三日合意以降のパレスチナ人の死者は六二人、家屋

シャラード外相は記者団に、中東の人民は和平を熱望していること、シリアは米との関係を改善したいと望んでいること、「われわれは、米がそうするように、わからが地域における和平、安全保障、安定に関して留意している」と語った。

九一年に崩壊するまで、ソヴィエトがシリアの主要な政治的、軍事的な後ろ盾であった。

クリントンに同行した高官は、AFPの記者に、国務省のテロ支援国リストから除外されるには、シリアが「そのあり方を変えるべき」であると語った。同高官はまた、同サミットの非現実的な予測、期待に警告して、「眞の和平への関わり、テロ組織の展開を許すということでは矛盾がある」とも語った。

関係正常化に関するアサドの声明は最初のものであり、彼は、ゴラン高原からの撤退を討議するためのイスラエルのこれまでの条件に合致するものを提示した。ゴランには、現在、一万三〇〇〇の入植者が住んでいる。

同サミットの直後に、ある高官は、アサド大統領は「今日、イスラエルとの和平の視点、名譽ある平和を語ることによって、その道への新しい基礎を据えた。私は彼がそうしたのは最初のことである」と記者団に語った。同高官は、米記者に、会談の結果は「顕著な」ものがあり、それはアサドが「これまで口にしなかった、多くの要素」もあり、「イスラエルとの対立の終結、とりわけ、イスラエルとの和平への関わり、△正常で、平和的な関係▽とい

う語句の使用、これらすべては現在的な言葉としても最終的なものとしても、これまでは使はれることはなかった。われわれは、少なくとも最終的なものとして、新たな基盤が据えられた、と見なしている」と語った。

クリントン同様、同高官も正常で平和的な関係はどういうことを意味するのかを明確にすることは拒否した。が、彼は、アサドは「和平の必要性における彼の理解、和平のための広範な要因における理解をわれわれに話したし、実際に私はそれ以上のことを話すことは望まない」と語ったが、アサドが公的に和平の必要物に応える用意のあることを語った、と付け加えた。

△イスラエル▽

アサドの和平への言葉に対しても、ペレス＝イスラエル外相は、シリアの大統領はジュネーブでの声明で十分に踏み込んでいない、と語った。

「論調は非常に肯定的で失望させないものではあるが、満足するにはあまりにも一般的である。われわれは失望はしていない。私は使用された言葉の調子を評価する。しかし、それらはもとと確実な言葉に翻訳されねばならない」、

と彼はエルサレムで記者団に語った。彼は、政府は「完全に満足したわけではない」、なぜなら、細部が「明確ではっきりとした指標を示す」ものではないからである、と語った。

首相のラビンも、アサドの言葉は十分に細部を伝えるものではないと言う。「私は記者会見から結論をだそうとは思わない。正常化に関し

て語ったのはクリントンであり、私はアサドの口からその言葉を聞かねばならない。シリア側はすでに正常化について語っているが、これが和平の概念と連関していること、その議題は、そしてイスラエルはどんな代價を払うのかなど問題がある」と、彼はイスラエルTVで語った。

た。

同サミットの直後、ロスをはじめとする国務省の高官が、イスラエルの指導部にクリントンとアサドの会談内容を伝えるためにイスラエルへ飛んだ。

右派の指導者ネタニヤフはイスラエルとシリ

アの間の和平の動きを批判し、「この和平では紙切れと引き替えにわれわれをゴランから締め出すものであるし、大使の交換は眞の和平ではない」とイスラエル・ラジオで語った。

△機構▽

ジュネーブの記者会見で、クリントンはシリアと米国は、国務省の年次報告のテロ支援国リストにシリアが載っていることなどの違いを解決するための努力を開始すると語った。

外相のシャラードとクリストファーは、関係の改善に向けた機構を設置するであろう、とクリントンは語り、「われわれは進展が作られたと考えている」と付け加えた。彼は、関係はシリアの和平解決への努力の拡大をもって改善されよう。だが、われわれはこうした条件が満たされない限り妥協しない。それはシリアがゴランの主権を再入手することなく、妥協しないのと同様である。それゆえ、和平と安全は主権のために交換しなければならない」と左派のメレツの指導者サリードはイスラエル・ラジオで語った。

クリントンは、シリアの指導者が「相互の安全を保障する必要性があるが、イスラエルの安全はまったく問題はない。なぜなら、ダマスカスの方が、テルアビブやエルサレムよりもゴランから近いからである」と語った。

「明らかに、もし双方が合意を行い、双方がわれわれを必要とするなら、われわれはそれに真剣な考慮をしなければならない。それは、われわれが議会に計らねばならないことである」とクリントンは語った。

△国民投票▽

同サミットに続いて、シャラードは「同サミットの結果に関して大きな希望が作られた」と強調し、「ボールは今やイスラエル側にある」と、テルアビブの眞の意図と「和平への熱望における眞剣さ」がワシントンで予定されている二国間交渉の中で証明されることになろう、と語った。

イスラエルの応答は、それほど肯定的ではなく、シリアの怒りを誘うことになつていて。それは、ゴランをシリアに返すべきか否かをイスラエルの国民投票に計るという提案として出てきたからである。

他方、ラビンは、初めて、テルアビブは同高

原の入植地を撤去しなければならないだろう、

という発言をした。「私は、われわれが合意に

達した際には、もし、われわれがわれわれ自身に忠実で、決定が単に議会の多数派でなされただけではないとしたら、われわれは国民投票をもって決定せねばならない、「われわれはすでに、ゴランからの撤退の原則を受け入れた。もし、われわれがゴランからの顕著な撤退しなければならないとしたら、これは入植地の撤去を必要とするであろう」、とラビンは一九日にイスラエル・ラジオで語った。

同首相は、その代価は「痛苦なものであり、多分、イスラエル人が想像している以上のものであろう」とも語った。

他方、ゴラン問題とは反対に、西岸、ガザの入植地は安全であることをラビンは強調した。

「西岸、ガザには、同様のリスクは存在しない。

反対に、政府はゴランに関して領土的な妥協を提案する」、それは九二年に労働党が権力に着いたときの和平の方向に基づくものである、と語った。

(*編注) アリーハとはジェリコのアラブ名。以下、資料ではアリーハとします。

和平の後でもレジスタンスは

継続(抄)

アル・ハヤト紙、九四年一月二六日

ハズバラーの元書記長トフェイリ師は、米T.Vとのインタビューで、シリアやレバノンが和平に合意し、イスラエルとの関係を創つたとしても、イスラエルに対するゲリラ活動は継続する。

るべきであると、よびかけた。トフェイリ師はつまり、米大使館と海兵隊(への爆弾攻撃)に関してある。これら双方は(八二年のレバノンへの)シオニストの侵略の結果と関連する。米は侵略を支持したし、海兵隊の到着はシオニストのプロジェクトを支援するためのものであった。これはレバノン人民を激怒させ、米とシオニストに対して自らを防衛することへとかきたてた。したがって、私は海兵隊への、フランス軍への、そして米大使館への爆弾を全面的に支持している。

だが、外人の誘拐には反対したし、今も、そうする。なぜなら、それは肯定的な結果よりも、害毒を作り出したからである。われわれは人質をとるということを考えていかないし、そうした行為はイスラムの運動一般にとって、また、ホメニ師や(イランの)イスラム革命にとって有害であると見なしている。

アラブはイスラエルとの関係正常化に対する平和的な反対・抵抗の方法を有してはいない。

正常化に対する平和的な抵抗とは、経済的な方法、報道上、そして外交的手段をもって競争することを意味するが、西側とそうした競争をすることは不可能に近いであろう。経済的にいっては、米経済がシオニスト擬制国家の経済へのサービスになっていることをわれわれは知っているからである。また、一部の人々は和平後

の豊かさを云々する。しかし、エジプトを見れば分かるように、和平の後には単に死と飢餓が続くのみである。

そうしたことから、私は、いわゆる「和平」後においても、シオニスト擬制国家とそのシンボルに対する作戦を続けるべきであると考える。

アラブの政権による戦士たちの処刑や殺害になるととも、シオニスト擬制国家とのシンドボルに対する作戦を続けるべきだと考える。

一人の人民として、われわれは、レバノン政権が関わっている条約に拘束されるものではない。われわれは、われらが敵にに対する抵抗を継続するべきであるし、たとえレバノン政権が反対しようとも、それはあらゆる手段、軍事的な方法をもつてしなされるべきである。仮に、世界のすべてが「和平」に向おうと、われらが義務とわれらが使命はシオニスト擬制国家に対決し、アラブの土地のすべての解放を達成することにある、と私は考えている。

(それは自殺を意味しないか、という問い合わせをして)、いや、反対に自殺をしないための行為なのである。

(では、そうした武装行動は和平へと向うシリアと協調できるのか、という問い合わせをして)、シリアはレジスタンスの中に強力な同盟者を有することになる。私は誰かと対決しようとしているわけではない。言い換えれば、私は、レバノン政権やシリアの政権による軍事的な反応を期待しているわけではない。

(南部レバノンからのイスラエル軍の撤退は

後においても、シオニスト擬制国家に対する軍事的な戦いを支持する。私は、仮にその代価が

アラブの政権による戦士たちの処刑や殺害にな

るとしても、シオニスト擬制国家とそのシンボルに対する作戦を続けるべきであると考える。

アラブの政権による戦士たちの処刑や殺害にな

るとしても、シオニスト擬制国家とそのシンボルに対する作戦を続けるべきだと考える。

決議四二五に関する矛盾した見解

アッサフィール紙、九四年一月二七日

レジスタンスの正当性をなくするのではないか、という問い合わせに対して、もし南部が解放されたなら、それは彼らが領土の一部が解放されたということを意味するだけであって、われわれは残りの部分の解放のために戦いを継続しなければならない。

(アサド大統領とクリントン大統領との会談をどのように見ていているのか、という問い合わせに対して)、私は、あの首脳会談はシリアと米の間のよりよい関係への基礎を設置した、と考えている。

国連安保理はまもなく、レバノンの要請で、今月末にその期限が切れる在レバノン国連暫定部隊(UNIFIL)の六ヵ月間の延長について決定をする。一六年前からレバノン＝イスラエル国境地帯を警備している平和維持軍の延長をレバノンが要請するのは決して初めてのことではない。

が、今回も、これまでとは少し様相が違っている。中東和平会議が微妙な段階に入っていること、とりわけ、一六日のジュネーブでのシリア＝米首脳会談の後、その進展が見込まれていることが、その主要な要因である。

UNIFILは、七八年のイスラエルの南部への侵攻に対して、無条件・即時の撤退を求め

た安保理決議四二五に沿って設立された。ガートリ国連事務総長は、安保理にUNIFILの延長を求めるレバノンの要請を承認するよう、勧告した。が、決議四二五を巡る国際的なあり方には変化の新たな要因がある。

国連は、いつもはそうしているのに、今回は安保理での決定に先立って、それを延長すべきだを決定するためにUNIFIL地域を査察する使節団を派遣しなかった。ガーリーの報告書には安保理の常任理事国メンバーの見解が考査されるものとなっている。ガーリーの書面は、四二五の実行はレバノン＝イスラエルの和平交渉の結果と直接的にリンクするという、米国や他の大国の見解に沿つたものとなっている。

ワシントンは、七八年の決議四二五においては、その決定を推進した国の一つである。が、米政権は同決議を延長するよりも、国連が関係諸国にそれを遂行するように強制するものにしようとしている。つまり、UNIFILとの協力の下で、決議を実行するのはレバノン政府の責任というのである。ワシントンは、同決議を遂行する上で最も良い方法はレバノンとイスラエルが安全保障の調整と理解を作り出し、それがイスラエル軍の南部と西ベカーカからの撤退を導くようすべきである、とみなしている。

米国はまた、増大する一方のUNIFILの財政＝米がその四一%を支払っている(赤字に懸念を表明している。ロンドンもワシントンと同様の見解を有している。英政府は、レバノンは南部と西ベカーカにおける、その主権と領土保

の豊かさを云々する。しかし、エジプトを見れば分かるように、和平の後には単に死と飢餓が続くのみである。

私は、二つの事例について言つたのである。つまり、米大使館と海兵隊(への爆弾攻撃)に関してある。これら双方は(八二年のレバノンへの)シオニストの侵略の結果と関連する。米は侵略を支持したし、海兵隊の到着はシオニストのプロジェクトを支援するためのものであつた。これはレバノン人民を激怒させ、米とシオニストに対して自らを防衛することへとかきたてた。したがって、私は海兵隊への、フランス軍への、そして米大使館への爆弾を全面的に支持している。

だが、外人の誘拐には反対したし、今も、そうする。なぜなら、それは肯定的な結果よりも、害毒を作り出したからである。われわれは人質をとるということを考えていかないし、そうした行為はイスラムの運動一般にとって、また、ホメニ師や(イランの)イスラム革命にとって有害であると見なしている。

アラブはイスラエルとの関係正常化に対する平和的な反対・抵抗の方法を有してはいない。

正常化に対する平和的な抵抗とは、経済的な方法、報道上、そして外交的手段をもって競争することを意味するが、西側とそうした競争をすることは不可能に近いであろう。経済的にいっては、米経済がシオニスト擬制国家の経済へのサービスになっていることをわれわれは知っているからである。また、一部の人々は和平後

ている。

(編注) 一月二九日、安保理は、議論をすることもなく、全会一致でUNIFILの期間延長を採択した。

イスラエルは和平過程を利用

アラブ・ニュース紙、九四年一月二五日

九四年予算二〇一・四億シェックル(約七〇億ドル)に示されるように、イスラエル軍は、次の世紀に向けた隣国に対する軍事的優位を確実にする計画を設定した。

昨日特別閣議に提出された、この数値のほぼ三分の一に当たる一八億ドルは、米国からの直接的な軍事援助として来る。

副参謀長シャハク将軍は記者団に、軍の戦略的な評価は肯定的なものであると語った。「われわれは和平過程が継続すると予測しているし、米国との関係はこれまでなく良い。隣国の多くは再武装しているが、彼らには湾岸戦争の後の戦略的な弱さがあるからである。イスラエルは戦略的な優位を維持するであろう」と彼は語った。

現在の軍の計画で強調すべき中心的な見積もりとして、近い将来の戦争の可能性は非常に低く、これまで高度の非常体制に備えて使われてきた基金は、近年欠乏していた武器購入や訓練など、別の方面に移行しうるという。

「われわれは和平過程から起つてくるところ

の、軍事的技術的な強化への機会を有している」と軍の企画部長であるダヤン将軍は語った。

購入計画のトップには、新しい米国製戦闘機があり、それでイスラエルは長期的に直面している戦略的な脅威に対抗できるようになることを望んでいる。購入するのを、F-15EにするかF-16A/Sにするかの決定はまだある(*)

が、その中心任務、目的は同じで、長距離を行し、イランやイラクが開発してきた、ミサイルや非通常兵器に対抗するためである。約二〇億ドルがイスラエル空軍のこうした買物の額で、同空軍はアパッチ、ベルというヘリコプターの購入も企画している。

空軍のもう一つの要のプロジェクトは、アロー・ミサイル迎撃ミサイルの開発であるが、これも主要には米国からの資金援助に依っている。しかししながら、多くのイスラエルの企画者たちは、このシステムは開発、そして配備にはあまりにも値段がかかりすぎると考えており、同計画を削ろうという圧力がかかることは必死という。

他方、イスラエル陸軍は、部隊の近代化を計画しているが、それには兵員輸送車数百台とイスラエルが開発し、同軍が「世界で最良の戦闘中心の戦車」と呼ぶ、メルカバ-3戦車の導入がある。

砲兵隊は、湾岸戦争で西側同盟軍が荒廃的に使用した、多弾頭ロケット・システムの供与を求めている。また海軍は、米国製のサークル・ミサイル艦を求め、九五年には独が資金を出したドルフイン潜水艦を進水させようと準備中である。

る。

PLOとの合意に基づく、ガザとアリー・ハ地区での再展開には、少なくとも一億ドルが当たれている。が、これにはガザ周辺に設置され

る電流を通したフェンスの見積もりは約一億ドルは含まれてはいない。

九四年には、一七・六万の通常兵士とこうした予備役は、訓練にいっそうの時間を当てるこ

とに至る。それに軍の予算の約一〇%が当たられている。参謀長、バラク将軍の指示の下、軍は、約四三万の予備役に課している予備役

義務、約六四〇万日を四〇万日削減する計画で

ある。

九四年には、一七・六万の通常兵士とこうした予備役は、訓練にいっそうの時間を当てるこ

とに至る。それに軍の予算の約一〇%が当たっている。参謀長、バラク将軍の指示の下、軍は、約四三万の予備役に課している予備役

義務、約六四〇万日を四〇万日削減する計画で

ある。

また、レバノンのアッサフィール紙は、アラブのほとんどはイスラエルとの軍事対決はなくなつたと考えているが、米国もイスラエルのためには軍事的な選択肢もあるとしている。最新鋭の武器の供与にそれは示されている。また、ワイヤーマン(大統領)のトルコ訪問では、安全保障と諜報での協力を合意した。他方では、米国はアラブにボイコットの解除を要求しているが、それは、イスラエルをして、経済的社会的に持つていらないものと戯れること可能とする。これらに共通することが、イスラエルの言う、「安全保障」というものなのである▽と警告を発している。

レバノンの水問題(抄)

アンナハール紙、九四年一月二十四日

レバノンでは水が浪費され、その資源は政府によって正しくは利用されていない——これが「中東における水問題」と題して、ペイルートで開催されたセミナーの結論の一部である。

ペイルートの戦略研究蓄積機関が主催した同セミナーには、何人の専門家や調査担当者が参加した。二年間に渡る研究が同セミナーに提出された。このセミナーを開催することになった理由には、科学的統計的な事実を基礎にした、水問題に関するアラブの視点を確立することともあった、と主催者側は語っている。九一年にマドリッドの和平会議に参加したものの、アラブ側は水問題に関する準備をしてはいなかっ

た。他方、イスラエル側は科学的な事実、統計を基礎にした独自の見解を提起してきた。こうしたことから、同機関は調査、研究を開始したという。

B・ジャベルの研究、「レバノンにおける水問題」に焦点をあててみよう。

ジャベルは、レバノンは大量の水を有しておらず、これがイスラエルがその共有を要求する理由となつていて、と語った。だが、レバノンでは水資源のすべてが利用されているわけではないし、レバノンの市民は適切な水の分配を享受しているわけではない、と展開した。

先進諸国や多くの第三世界での一人当たりの一日平均の水の消費量はほぼ二〇〇リットルである。が、レバノンでは、現在七四リットルとなっている。レバノンには、その領内に一五の河川があるし、毎年八六〇億立方メートルの降雨がある。にもかかわらず、こうした数値になつている。七三年には、そのほとんどの町や村は十分な水があった。だが、長い内戦の影響を受け、水施設は老朽化し、ほとんど二五年以上経つものばかりであり、それが今日の水問題の悪化の原因となっている。

水施設の維持の欠如の結果、汚染＝公害という問題が生じている。水施設というのは、とりわけその浄化施設に関しては、更新され、恒常的なメンテナンスが必要である。水は飲用に耐えるような浄化が必要であり、それは世界保健機構(WHO)でもその基準を提示している。

イスラエルがレバノンの水を盗んでいるのは事実である。ヘルモン山からレバノンを通ってガリリーへと流れる、ワザニ川がその端的な例で、同川はかつてはレバノンの平原を潤していたが、現在それは完全に暗渠とされ、レバノンでは使用できず、そのすべてが被占領下のパレスチナへと流されている。その他にも、イスラエルは水を盗むため、国境を越えた水路をいくつか建設した。だが、悲しいかな、正確な事実が把握できていない。

要は、レバノンはその足元に多くの水を有し

- ・エルサレム、女性によるナイフ攻撃。またヘブロン地区では、軍への攻撃、兵三人負傷。
- その後軍がアジトを襲撃、九時間の包囲の末にロケット攻撃で家屋破壊し、四人を殺害。
- ・PLO、パ開発銀行を創設し、援助の窓口に（アラファートは主要ポストに側近を指名）。

一月一四日

一月一五日

- ・ガザ、入植者への攻撃（一人死亡一人負傷、攻撃者も射殺された）。他方、人民の鬭い、四人負傷。
- ・ベイリン、占領地に入植というのは最初から人八人負傷。

重刊田賦

重要日誌

一九九四年一月一一日～二月一〇日

一月一一日
・ラマラ、人民の鬭い、入植者負傷。
・アラファト、イスラエルは策略をめぐらし、パンツスタンを創出しようとしている。

一月一二日
・ハーレツ紙、ディモナの核施設から廃棄物が流出と報道（本文参照）。

一月一三日
・西岸占領軍司令官など、ヘリ事故で死亡。他方、ネゲブの刑務所で、刑務官が同僚を射殺。

一月一四日
・南部、SLAがクリスチャンの村を包囲。若者の登録を強制。

一月一五日
・エルサレム、女性によるナイフ攻撃。またヘブロン地区では、軍への攻撃、兵三人負傷。その後軍がアジトを襲撃、九時間の包囲の末にロケット攻撃で家屋破壊し、四人を殺害。（アラファートは主要ポストに側近を指名）。

一月一六日
・ガザ、入植者への攻撃（一人死亡一人負傷、攻撃者も射殺された）。他方、人民の鬭い、四人負傷。

一月一七日
・ジユネーブ会談（五時間半、本文参照）。

一月一八日
・ラマラ地区とガザで、イスラエル兵への攻撃計三つ、一兵士負傷。

一月一九日
・アシュラウイ、ジユネーブ会談はPLOの交渉にも肯定的に反映するであろう。

一月二〇日
・南部、レジスタンスの攻撃。イスラエルの砲撃で国連軍フィンランド兵が負傷。

一月二一 日
・ガザ、入植者への攻撃。ヘブロン地区の人民の鬱いで、六人負傷（一人は死亡）。

一月二二日
・シャラー、ヨルダンへ会談の報告に。イスラエルの反応を批判し、シリア領に関して国民投票などと語る権利はない（本文参照）。

一月二三日
・ガザ、地元指導者一〇人が、最近の逮捕へ抗議とPLOは獄中者の釈放まで交渉停止をとハンスト。他方、軍基地への攻撃（攻撃者射られ負傷）やイスラエルのバスへの放火をとハンスト。アラファト、ムバラクにオスロ会談の報告。

一月二四日
・ガザ、地元指導者一〇人が、最近の逮捕へ抗議とPLOは獄中者の釈放まで交渉停止をとハンスト。他方、軍基地への攻撃（攻撃者射られ負傷）やイスラエルのバスへの放火をとハンスト。アラファト、ムバラクにオスロ会談の報告。

一月二五日
・一〇組織、二〇人の指導部を形成した、恒久的な指導部が民主的に選出されるまで、敵に対する闘争を指導する、と発表。

一月二六日
・ガザ、大量逮捕と一家屋へのロケット攻撃。エジプト＝PLO、経済合意に調印。

一月二七日
・ガザ、軍パトロールへの攻撃（二一〇）、兵士一人負傷。

一月二八日
・西岸、入植者が入植地二倍化行動、三六人逮捕（ただし、すぐ全員釈放）。

一月二九日
・フセイン王、ラビンと会談の用意あり（本文参照）。

一月二〇日
・アンマン、映画館で爆弾、七人負傷。

一月二一 日
・南部、レジスタンスの攻撃。占領軍の砲撃で終了を発表。

エジプトの原理主義者の組織であり、サダト暗殺でその名を知られている、ジハードの創設者者の一人ハビブ氏は、インタビューに応じて、無原則的な暴力行為や国家との対立行為はイスラムの流れの利益に沿っていないこと、西側の民主主義ではなく、伝統的な民主主義の概念こそ必要であることを強調した。

テロに関して、神の敵に対するテロはモスクムに与えられた権利、必要物としてある。が、（現在みられる）警官に対する攻撃はそうとは言えない。暴力行為や国家に対する対決、衝突は前向きの結果をもたらさないであろう。実際そうした行為はイスラムの運動総体にとって利益とはならない。

組織は、社会に対して開かれている方がいいし、その中にイスラムの存在を確立するようとする方がいい。戦略的な見地は単なる発砲を直服したものとしてあるべきである。発砲をもつての行為と運動形成は必要な結果へとは導かないと

われわれは、イスラム運動に対する暴力を仕掛けたのは、歴史的にも、国家であることを強調する。また、現在起っているいわゆる暴力行為のすべてを、イスラム運動のせいにすることはできない。（イスラエルの諜報機関）モサド、一部の武装キリスト教徒勢力、あるいは時には國家の諜報機関そのものが、作戦のいくつかを展開している可能性が大きい。

もし、一部に原則に忠実でないグループが存在し、そうした部分が作戦を展開しているとしたら、そうしたことのすべての責任をジハードに押しつけることはできないのは言うまでもないであろう。ジハードは、明確な文明的な綱領を有しているし、私はジハードがそうした作戦を展開するのは適切ではないと考えている。

多くは、イスラム主義者が民主主義に反対していると考えている。だが、民主主義の概念に関する、一致したものはない。西側そのものにおいてもそうではないか。民主主義の特定の構造や、特定の形態などに関して、一致などはない。

主主義と言ふのだとしたら、われわれはそれを使うことを拒否する。われわれはそれに関して別のものをしてゐる。イスラムのシユアラ（評議会、と訳すことができる）がそれに相当する。われわれは、独自の文化を持ち、われわれの文化的な正当かつ正統な性格は、西側のそれはかなり違つてゐる。

イランのシーア派との宗派的な違いが、ジハードをして、イランと協力することを妨げはしない。宗派的な違いは、現在それほどの問題ではないし、イランとの協力、協調は必要なことであろう。だが、私はそれとの協力、協調に関しては、保安上の理由から留保している。

ジバーリドの基礎的原則は、宗教法をふみにじり、神の教えに沿つた統治をしない支配者に対する決することである。神の教えに沿わなかつた支配、統治の例として、サダトがあり、ナセルがある（ナセルは、同士会の暗殺の試みを逃れることはできたが、サダトは周知のようにジハードに殺された）。

もしイスラム主義者が権力に着いたとしても、西側との協力、協調は継続するという考えには合意する。そうした見解はほぼ眞実だと言えよう。私は、エジプトやアルジェリアにイスラム共和国が設立されたとしても、外部の世界と決裂するとは考えない。そうした国家と西側とは共通する利益が存在するだろうからである。

「一人死」「二人負傷」

・サリド、遅かれ早かれ、パ国家が樹立される。

一月二七日

・ダルール、レジスタンスは正当な権利。イスラエルが撤退すれば問題は終結し、軍は全域の治安を確保する。

一月二八日

・アラファト、イスラエルが障害物設置と非難。レバノン、イスラエル諜報機関に連なるスペイ一二二人を逮捕。

一月二九日

・カナダ、ラビをコカイン所持で逮捕。

一月三十日

・アラファト＝ペレス会談（スイスで）。

・ペイルート、ヨルダン等書記官暗殺事件。

・ゴラン、イスラエルの平和運動がシリヤとの和平＝撤退要求のデモ。

一月三〇日

・ガザ、入植者への攻撃（死亡）。他方、手投げ弾攻撃で三兵士負傷。

アラファト、日曜に再度カイロで会談する。

最終合意は非常に近い（ただし、イスラエル側は、まだまだ時間がかかると対応）。

・カイロ、多国交渉武器制限部会開始（五日間の会議は結論だせず。米ロへの批判の声）。

二月一日

・エルサレム市当局、アラブ女子学校の他への移転、入植の活性化を決定。

・アラファト、来週カイロで調印を。そのためにもラビンがカイロに来るのを希望する。

これ以上の遅れは中東和平過程を混乱させる。

調印後すぐに撤退開始を。

二月二日

・ヘブロン地区、入植者への攻撃（三人負傷）。

・国連＆アムネスティ、西岸、ガザでは人権侵害、殺害、拷問、土地接収などの継続と報告。

二月三日

・ガザ、「特務」がタカ指導者を襲撃。射ち合いでになり、タカ一人死」「一人負傷、「特務」

二人負傷。またガザ市内では別のタカ・メンバの逮捕や一歳の少年負傷。ヘブロン地区では、パ人射たれて重体（本文参照）。

・アサド、オーストリー首相に、被占領下のアラブ領土に一人のイスラエル兵でも残つてい

るかぎりラビンとの会談はない。

・ヨルダン、イラン大使館員二人に出国勧告。

二月四日

・ガザ、人民の鬭い、五人負傷。ナプロス地区

でも、三人負傷。

・南部、レジスタンスの攻撃二つ。

二月五日

・ガザ、学校帰りの少年が射殺された。数百名

が集結し、和平合意を非難するスローガンを叫んだ。また西岸でも一人射殺された。

二月六日

・ガザ、人民の鬭い、三人負傷。

・カドゥミ、ラビンはイスラエル勢力の引き上げを避けようと試みていると非難。

・フェイン王、米からの帰りにダマスを訪問。

（原稿の到着が遅れたため、発行が

四人死亡五人負傷。イスラエル機は執拗な空爆（本文参照）。

・エジプト、ガマー・イスラミーヤ、外人に最終よびかけ。他方、カイロの銀行で爆弾。

二月八日

・フェイン王、PLOを批判（本文参照）。

・南部、レジスタンスの攻撃。激しい砲撃戦、占領軍は砲を増強。

二月九日

・イスラエル内、タクシー運転手行方不明。イ・ジハードが誘拐＝殺害と声明。

・カイロ調印。アラファト、原則宣言を紙の上から実際のものにする非常に重要なステップ。

しかし、人民の多くは警戒気味で、イスラエルに望むものを与えたと批判的（本文参照）。

・ゴラン高原、マスクをした男たちが親シリアルに望むものを与えたと批判的（本文参照）。

・ゴラン高原、マスクをした男三人を負傷させた。

・南部、レジスタンスの攻撃（三つ）。他方、南部情勢を巡って論戦（本文参照）。

二月一〇日

・イスラエル内部、ユダヤ農民への攻撃＝死』。

・アラファト、ヨルダンを訪問し、フェインに報告。月末にはラビンと最終合意に調印することを希望する。

・レバノン、ヨルダン大使館員の殺害で四人を逮捕。

・アラブ連盟、ボイコット解除（五々のイスラエルの情報操作を批判）。